



夫との二人三脚で、 華やぎの果実を育てていく。

ぶどう、葉タバコ、白ネギなどを生産する農家で生まれ育ち、子どものときから手伝ってきたので、嫁いできて携わることになったいちごの世話にもへこたれることはなかった。

「畑の仕事は、どれも大変ですから」
覚悟はちゃんとできていたということだろう。

現在、西本玲子さんが夫と力を合わせて作りつづけているいちごは、ちよつと長めの形をした「あきひめ」。やわらかい果肉が特徴で、酸味は少なく、ジューシーで甘い。人気の定番だ。

九月の声を聞いてすぐ定植、そこからいちごづくりの一年は始まる。毎日見守り、寄り添っていくと、十月の中ごろに花が咲く。間引きをして整える。そこからはミツバチに働いてもらう。いちごは虫媒花だから昆虫が受粉してくれないと果実が実らない。

そして、いよいよ冬支度。二重のカーテンに思いを託して、いちごを厳寒から守る。十一月になってまもなく出荷が始まり、それは翌年の六月まで続いていく。こうして、一年を通して気の抜けない、体力も要る仕事を黙々とこなしていくことによって、「あきひめ」の華やいだ姿を人びとに届けていくのだ。

平成二十九年、めでたく傘寿を迎えた。かわいい曾孫もいる。「大型農業ではないから、体力が落ちてもだいじょうぶ。まだまだやるさ」と頼もしい夫との、息の合った二人三脚はさらにつづく。

いちご農家
西本玲子

ゆ
う
ゆ
う、
ゆ
り
は
ま

